

ねものがたり さと

# 「寝物語の里」

おかし。

近江おうみと美濃みのとの国境こっきょうに小さな溝みぞがあつてな。その両側りょうがわに宿屋やどや

が並んでいたんや。中仙道なかせんどうを行ったり来たりする旅人たびびとたちが、

それぞれの宿とに泊とまつてな、隣となりの宿とに泊とまつている人と

大きな声こえで、寝ねながら、お国くにじまんや世間話せけんばなしをしてたんやてエ。

美濃みのの人が、

「今晚こんばんは、わしの番ばんや、おもろい話はなしをしようかなも」というて、話はなししたしたんや。

おかし、あるときになも、江戸えどのほらふきが美濃みののほらふきのところへ、ほらふきにこぎつた。

ところが、美濃みののほらふきが留守るすやので、子どもがでてきよつた。

「父ちちさんは」

「父ちゃんちちちゃんはなも、こないだの地震じしんで、富士山ふじさんが傾かたむいたんで

直なおしに行いつとりなさる」

「じゃ、母ははさんはどこどこにいなさる」

「母さんはなも、びわ湖の底がぬけたんで、金だらいを持って  
押えに行きんさった」

子どもは、けろっとして答えよった。

そんで、江戸のほらふきは、その子を困らしてやろうと思うて、

「きのうの風で、奈良の大仏さんの鐘が、このあたりにとんできた

はずやが、お前、知らんかい」

子どもは、すました顔で、

「あッ、あれか。あれはなも、おらの家の裏の軒先のくもの巢に  
引っかかっとったワ」

と答えよった。いやはや、子どもでも、こんなにはらふくのかと

驚いて、逃げて帰りなさったということや。

美濃の人が話し終わって、

「どうじゃ、おもしろかろうがなも……」

というて、じまんすると、近江の人も負けんと、

「じゃ、わしの方は、こわい話をしたろ」

というて話したたんや。

おかし、ある男が親せきの法事で、隣村まで行ったんやが、  
 帰りがおそろうなつて、夜になつてしもうた。

さびしい夜道を、ひとりで森にさしかかったときや、

風もないのに、木の葉がサラサラと足もとにまい落ちてくる。

すると、子どもを抱いて髪を振り乱した女がやってきてな、

「わたしの髪がほどけて、かんざしが落ちて見あたらんや、

さがしてくだされ」

というて、そばに寄つてきよったんや。ふと、顔を見たら、  
 目がひとつの女やった。

男はびっくりして、夢中で森を通り抜けようとしたら、ひとりの  
 じいさんに出会った。やれやれ助かったと、胸をなでおろして、

「そこで、こわーい化け物に会った」

というて声をかけると、老人は、

「化物は、こんな顔かあ」

突き出した顔を見ると、その老人も、ひとつ目やったので、男は、  
 とび上がるほど驚いて、森をぬけ、とんで家へ帰りよったんや。

話を聞き終わった美濃の人は、

「おおこわ、化け物が出んうちに、早よ、ねよ」

というて寝床へもぐり込んだそうねどこな。

いつも、こんなぐあいばなしで、自分の国のじまん話しょうばいや、商売しょうばいしに行まった町のうわさ話まなどしてねものがたりいたそうや。

それで、このあたりのことを寝物語ねものがたりの里さとというて、いまでもかた語りぐさかたになつてるといふことや。

「新版」日本の民話シリーズ74巻『近江の民話』

未来社  
2017年より